

寂聴と信長と法然

秋山 駿

「あなたもお寺の子。今からでも遅くないから、もつとちやんと仏教について勉強してください。」

こんな意味の手紙を瀬戸内寂聴さんからいただき、私は大いに赤面した。それとともに自分の生を深く返り見るがあった。

去年完結した「瀬戸内寂聴全集」(新潮社)、全二十巻の月報を一人で書き続けてきたが、『比叡』の巻に至って、私は大いなる困難に直面していた。

瀬戸内さんがいよいよ出家し、仏教の修行をするところが描かれる。

思い入れの深い衣装に一つ一つ別れを告げる場面がある。大切な急所で、女性の文芸批評家ならここから解説を始めるだろう。だが、女性の衣装など何一つ知らぬ私は、何も書くことがないのである。

髪を切って、出家、そして仏教の修行。これが作品の真のテーマである。それについて何か書かねばならぬ。だが、私の書く手は動かず、私は大いに困惑した。

瀬戸内さんの出家のことは、当時

の週刊誌の報道などで知っていた。ああ、大変なことをするものだなと感じたが、自分の心でよく考えてみることはしなかった。

文学と宗教とが重なるところにある他人の言葉、沢山ある知識人の言葉を借りれば、解説できるかもしれない、という甘い思いを、この作品は打ち砕いた。

なるほど。世を捨てる、ということとは、生のもつとも深刻なドラマであり、必死の敢行であった。

——わたくしはかくのごとく行爲した。その跡を、自分の心で素直にたどってごらん下さい。

この作品は、そう告げている。そして、出家するとき西行が詠んだという歌の深い処へ連れてゆく。

惜しむとて惜しまれぬべきこの世

かは

身を捨ててこそ身をも助けぬ

この歌の、心棒になるものが、仏教であろう。瀬戸内さんは今日、イラク戦争への戦争反対の新聞広告を出したりしているが、それは、心棒から発する、ごく自然な行爲なので

あろう。

私は「信長」という本を書いたせいで、信長の非凡な天才性について話をしようになった。すると、人に問われる。信長の以前に、信長のような革命を果たした日本人は誰ですか？

空海かな？ と答えようとして、一瞬、私はためらう。やはり何かが違う。

そんなとき、住職の小林覚雄さんが、中里介山『法然』(浄土宗)という本を教えてくれた。

介山といえば、あの『大菩薩峠』の作者である。私は全巻を読んだ。作品の底部に仏教という心棒が横たわっている、とうすうす気がついて

はいたが、まさかこんなに堂々と法然について書いているとは、私は知らなかった。

良い本であった。読み始めると、——あつ、法然こそが、信長の先駆であった。

と、すぐ感ぜられる。そんなことを分らせてくれる文章を、幾つか引用しておく。

「日本において、本當に、一宗教を創立したものは法然のほかにない(以下略)」

「古来、伝教・弘法はもとより、その当時の栄西・道元のごときも、

支那に渡って、本場で学んだことが多少共に筈となつてゐるのに、法然に至つては自身が支那へ渡らざるのみならず(以下略)」

「同時に眞の創立者で法然は、また本當の革命家である。日本において法然ほどの革命家はない。」

「そこで、日本の宗教史上に、法然ほど断乎としておのれ以前を否定したものはなく、法然ほど確乎としておのれ以後を指定した者はない。」

「彼は天成の平民的求道者であり、宗教的偉人である。(中略)」

彼は一宗の創立者であるのみならず、日本のすべての仏教を南無阿弥陀仏で統一してしまつてゐるともいえる。

彼の特色の一つは終生平民僧であつたことである。」

実は、信長も、本能寺で死んでいくときには、以前に官位を返上しての、無位無官であつた。

法然が、娼婦をも救つてやるように、信長は、新宿駅頭のダンボール箱に住むホームレスの紳士のような秀吉を、重く登用し、將軍義昭との

区別(差別)をしなかつた。

私は、お寺の子のくせに、法然のことを、浄土宗のことを、よく考えたことがなかつた。勉強しよう。(文芸評論家)